

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
個人研究費
2008年度研究成果報告書

研究代表者	所属・職名	氏名
	文学部・教授	石川 巧 印
研究課題	大学入試における現代文・小論文のあり方とリテラシー能力の育成に関する総合的研究	
研究期間	2008 年度	
研究経費	500,000 円	

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフは使用しないこと)

本研究は、現代文という受験科目およびそれを学習する生徒・学生たちの読書訓練という観点から、文章を読むという行為はどのような制度のもとで規範化され、現在に至っているかを考察し、大学におけるリテラシー能力の育成に具体的な提言を行うことをめざしている。また、現代文とほぼ同じ時代に出発し、多様な研究方法をもつに至った近代文学研究そのものが、この問題とどのようにつながっているのかという点も焦点化する。したがって、学問分野としては、近現代の歴史、文学、思想、教育、文化などに跨るかたちとなり、「リテラシー能力」というキーワードをもってそれぞれの領域を接続していく機能も果たすことができると考える。また「大学入試における現代文・小論文のあり方とリテラシー能力の育成に関する総合的研究」というタイトルからも分かるように、本研究では、現代文および小論文の入試問題を具体的に検証・分析し、そこから現在の学校教育が受験生に対して求めているリテラシー能力とはどのようなものを逆照射することを狙いとしている。つまり、入学試験問題というきわめて即物的な対象を通して、そこにどのような考え方や価値観が託されているかを明らかにしようとするものである。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[リテラシー] [小論文] [入学試験]

研究成果の概要（図・グラフ等は使用しないこと。）

本研究は、2007年度をもって研究成果報告書をまとめるに至った「大学入試における現代文と入学後のリテラシー能力の開発に関する総合的研究」（基盤研究C）の成果をふまえつつ、同研究を実施するなかで見えてきた新しい課題を展開しようとするものである（この研究成果は『「国語」入試の近現代史』（講談社メチエ・2008年1月）として上梓され、大きな反響を得ることができた）。

本研究では、まず、作文・小論文をはじめとする自由記述型の入学試験問題とその対策を歴史的に検証することによって、日本の高等教育において〈読み書き能力〉というものがどのように位置づけられ、どのような方法で能力向上が図られてきたかを総合的に考察した。同様の研究はこれまでも数多く蓄積されてきたが、その多くは作文・小論文の書き方指導、あるいは、学校教育の修身・道徳・国語といった授業科目とのかね合いのなかで「生徒によりよい文章を書かせるにはどうしたらよいか」という観点から論述されてきたに過ぎない。逆にいえば、そのベースになっているのは基本的に啓蒙の精神であり指導であり技術の獲得だった。

だが、本研究ではそうした〈教育〉的アプローチではなく、文章表現を中心とする〈読み書き能力〉はそれぞれの時代においてどのように測定されてきたのか、評価の基準はどこにあったのかという観点から問いを立ちあげ、文章を書くという行為はどのような制度、イデオロギーによって規範化され、現在に至っているかを浮き彫りにした。具体的には、■戦前から現在に至る受験作文・小論文を系譜的にまとめ、各時代の特徴を系譜的にたどった。■近年の小論文に求められているものは何かを明らかにした。■小論文を〈教える〉とはどういうことか？〈教える〉ためには何が必要か？という指導する側の問題を考察した。■自由記述の作文・小論文以外に文章の表現力、記述力が試される事例として、入試現代文の記述問題、小論文の一部に組み込まれる要約問題、そして学校教育において〈読み書き能力〉を鍛える方法のひとつとして活用されることの多い読書感想文などに着目し、特に高等教育を志す生徒たちが身に付けなければならない文章表現のスキルとはどのようなものであるかを明らかにした。■近年のAO入試において各大学が実施している多様な取り組みを検証しつつ、近未来の〈読み書き能力〉あるいは〈読み書き能力〉を測定・評価するためのよりよい方法を模索した。

また、そうしたリテラシー能力育成という観点から近代文学との関連、読書感想文、国語科教科書における教材のあり方などにも関心を広げ、下記の業績欄に書いたような論文を発表することができた。一年間の研究であったため、業績のいくつかは現在、刊行に向けて準備中であるが、2009年度内にはすべて活字化される予定である（特に、本研究に関して、最も中心的な成果は現在刊行準備中の『作文・小論文の評価史』（仮題・ちくま新書）に所収される予定になっている）。

※ この（様式2）に記入の、成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書（A4縦型横書き1枚・自由様式）を添付すること。

※ ホームページ等で公表します。（様式2-2）

研究成果の概要 (つづき)

※ この(様式2)に記入の、成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。